

『コンスタンティノス一代記』13章 “ソロモン王の盃の銘” —R. ヤコブソンのスラヴ文献学への貢献，再訪—

三谷 恵子

1. ヤコブソンと『コンスタンティノス一代記』13章

1-1.

ロマン・ヤコブソンの古スラヴテキストへの関心は、1930年代のプラハ滞在時代に起こり、以後、彼の多岐にわたる言語研究の中で、長く重要な位置を占めた。古教会スラヴ語、古ロシア語、古チェコ語などで書かれたテキストを、ヤコブソンは詩学・言語学・文献学のさまざまな視点から分析し数々の論文を発表したのだった。なかでもコンスタンティノス=キュリロスとその兄メトディオスの、スラヴ文語創世という事跡については、単に言語学者として古教会スラヴ語に関心をもつというレベルにとどまらず、スラヴ学者としてスラヴ民族史におけるその社会的、政治的意義にも注目していた。これをよく示すように、“The Beginning of National Self-Determination in Europe”と題された論文（1944年ニューヨークで執筆）は、政治史や政治理論を扱う専門誌 *The Review of Politics*（1945）に掲載されている。¹

しかしコンスタンティノス=キュリロスがヤコブソンにとって偉大な存在だったのは、コンスタンティノスがスラヴ民族に文化的大革新をもたらした“師”であったためだけではなく、この“師”の詩人としての才能を高く評価していたためだったように思われる。その見解は「大モラヴィアの聖人伝における詩の引用（Стихотворные цитаты в великоморавской агиографии）」（1957）や「哲人コンスタンチンの神学者グレゴリウスによせる賛辞」（Похвала Константина Философа Григорию Богослову）」（1970）によく示されている。これらでは、スラヴ初期文語世界にはポエジーが不在だったという、しばしば聞かれる意見に反論し、ポエジーの存在の証を『コンスタンティノス一代記』（*Vita*

¹ Roman Jakobson, *Selected Writings. VI. Early Slavic Paths and Crossroads. Part One* (Berlin-New York-Amsterdam: Mouton, 1985), p. 128.

Constantini; Житие Константина, 以下 VC) の中に見出そうとした。² そしてこれらの論文で、VC に含まれる詩性一なによりもそれはコンスタンティノスの詩人としての才能ゆえとされる一がよく現れる例として、第13章にある“ソロモン王の盃の銘”に言及している。³

“ソロモン王の盃の銘”(以下“盃の銘”)を含む13章は、コンスタンティノスがハザール人へのミッションを終えてコンスタンティノープルに着くまでの物語と、その後続くスラヴ伝道一皇帝ミカエルに託されて兄メトディオスとともにモラヴィアへ赴くという有名な出来事一の間に挟まれた、短い一節である。⁴

哲人は帝都に着き、皇帝に謁見したのち、祈りつつ黙して聖使徒教会で過ごしていた。さて聖ソフィア教会には、ソロモン王の作になる、宝石でできた盃があった。そこにはユダヤとサマリアの文字で銘文⁵ が書かれ、誰もこれを読むことも解くこともできなかった。哲人は盃を取り、これを読みそして解いた。まず最初の行は次のようであった一わが盃、わが盃。預言せよ、星の(現れる)前に。夜眠らずにいる初子たる主が飲むためのものとなれ。第二の行はこうであった一主の食べ物となるため、別の木から作られた。飲め、喜びに酔いしれよ、そして呼ばわれ、ハレルヤと。第三の行は続く一ここに王がおり、すべての会衆はその方の栄光を見るだろう。ダヴィデ王は彼らの中央にいる。その後 909 の数が書かれてあった。これを哲人はじっくりと数え、ソロモン王の時代の12年からキリストの誕生まで909年であることを覚った。つまりこれはキリストについての預言なのである。

ここで R. ヤコブソンが高い詩性を称賛した“盃の銘”(上記「わが盃、わが盃…」以下)の原文は、以下のようなものである。⁶

² Jakobson, *Selected Writings*. VI. “Стихотворные цитаты...”は当初 *Slavistična Revija*, X (1957) に、“Похвала...”は *Slavia*, XXXIX (1970) に刊行された。それぞれ *Selected Writings*. VI. pp. 277-285, pp. 207-239 に収録。本稿の引用は *Selected Writings*. VI による。

³ ただし VC には本来章の区分はなく‘13章’というのも後年の研究者の間で広く認知された区分によるものである。

⁴ すでに木村彰一、岩井憲幸訳「コンスタンティノス一代記：訳ならびに注(2)」『スラヴ研究』32号、1985年、191-215頁(13章は203頁)があるが、これに敬意を表しつつ、本稿ではあらたに訳出した。訳には Лавров ならびに FRB を参照：Лавров П.А. Материалы по истории возникновения древнейшей славянской письменности. Л., 1930. С. 26; FRB—Josef Emler, *Život sv. Konstantina, řečeného Cyrilla. Fontes rerum Bohemicarum*. T. 1. (Praha: Museum Království českého, 1873), p. 26.

⁵ FRB, Лавров では грани(‘行’)だが写本により словеси(‘言葉’)の異読もある。木村・岩井訳では「詩句」だが、本論で述べるようにこれが「詩」なのかどうか定かではないため「銘文」とした。

⁶ Лавров. Материалы. С. 26.

ҮАША МОА ҮАША МОА. ПРЮРИЦАИ ДОНДЕЖЕ СВѢЗДА. ВЪ ПИВО БОУДИ ГОСПОДИ. ПРЪВЕНЬЦОУ БАДЦОУ
НОЦІЮ.

НА ВЪЗКОУШЕНІЕ ГОСПОДНЕ. СЪТВОРЕНА ДРЕВА ИНОГО. ПІИ И ОУПІИ СМ. ВЕСЕЛѢМЬ И ВЪЗЪПІИ АЛЛИЛОУА.

СЕ КНАЗЬ И ОУЗЪРИТЬ ВЕСЬ СЪНЕМЬ. СЛАВОУ ЕГО. И ДАВЫДЪ ЦАРЬ ПОСРЕДЪ ИХЪ

そしてヤコブソンはこれを音節詩と解釈した。つまりこれらは三連の詩であり、各連は統語的まとまりによって4つのユニットに分けられ、第1連は2×(8+10)、第2連および3連は(10+9+12+9)の音節で構成されるのだという。⁷

さて、このVC13章については古くより、VCに最初から含まれていたのではなく、後年挿入されたのではないかという指摘があった。⁸ じっさいこの章は、前後の章とのテクスト的連続性に欠くようにも見え、「聖使徒教会で過ごしていた」から次の14章冒頭「(そして)哲人が神に歓喜していると、ふたたび別の出来事と、さらなる労苦が彼のもとに訪れた」と直接つなげて不自然ではない。そこで13章挿入説の立場では、これはむしろコンスタンティノスの卓越した—ソロモン王のごとき—知恵を象徴的に示すために、スラヴ・ミッションの前に挿入されたものとされる。

この、13章挿入説の強力な擁護者となったのは、ヤコブソンの講演を聴講したこともあったI. シェフチェンコだった。彼がスペインのエル・エスコリアル修道院図書館で発見した‘ソロモンの盃のエピグラム’ (Επίγραμμα εις τό ποτήριον τοῦ Σολομώντος⁹) と題された11世紀頃のギリシャ語断片的テクストが、VC13章“盃の銘”の前半部分とほぼ逐語的に対応することが明らかになったためである。¹⁰ シェフチェンコは、スラヴ語の“盃の銘”がギリシャ語で書かれた散文の逐語訳であることを根拠に、ヤコブソンが主張する「音節詩」説を否定し、これはただの散文であり、またギリシャ語断片テクストの存在がただちに13章の後年挿入を意味しないにしても、この“盃の銘”を含む13章は、ほんらいコン

⁷ Стихотворные цитаты. С. 282; Похвала. С. 230-231; ヤコブソンはここに挙げた三行めの後ろにさらにДЕВАТЬ СЪТЪ И ДЕВАТЬ「909」を加えている。ただしこの「909」とその解釈は、VC13章の中では「わが盃…」の部分と離れて記されているので、これをまとめて一連の詩とするのはかなり無理があると看做されるを得ない。

⁸ たとえば Петров А.Н. Апокрифическое пророчество царя Соломона о Христе находящегося въ пространственном житіи св. Константина философа по списку XIII вѣка. Памятники древней письменности. CIV. СПб., 1894. С. 4-5.

⁹ ほんらいは Σολομῶντος.

¹⁰ Ihor Ševčenko, “The Greek Source of the Inscription on Solomon’s Chalice in the Vita Constantini,” in *To Honor Roman Jakobson: Essays on the Occasion of his Seventieth Birthday 11 October 1966*, vol. III (The Hague: Mouton, 1967), pp. 1806-1817.

スタンティノスの事跡とはなんの関係もない外部要素の借用と断定したのだった。¹¹

これに対しヤコブソンは、この銘文の発生がいかなるものであれ、13章とVCのほかの部分とのテクスト的連続性にゆるぎはないと主張した。たとえばVCでは、サラセン人への派遣、ハザール人への派遣、そしてモラヴィア派遣というコンスタンティノスの3つの旅が語られるが、最初のサラセン行きミッションが終わったあとにも、コンスタンティノスは *Богъ милостивыи . . . на свою землю зъдрава възврати и пакы* (「慈愛の神は . . . 彼をつつがなく自らの国にふたたび帰された」) と故郷へ帰還し、その後まもなく *отърекся сего житія събде на единомъ мѣстѣ безъ мавы* (「現世のあらゆることを避け黙してひとところに暮らしていた」) と隠者のような生活に入る。¹² ヤコブソンによれば、VC13章冒頭の *философъ же иде въ цѣсарь градъ . . .* 以下はこのパターンの再現であり、ここにテクスト構成上の一貫性が示されるという。¹³ また8章では、ハザール人のもとへと赴く途中のケルソンでコンスタンティノスは、神の啓示によりサマリア語の聖典とシリア語の聖典を読みかつ理解できるようになる—*ѡтъ бога разоумъ пріимъ чести наѡа книги вес порока . . . обрѣте же тоу евангеліе и ѡдѣтирь роусьскыи писмены писано . . . къ богоу молитвоу твора възсортъ наѡатъ чести и сказати*。¹⁴ そしてスラヴ・ミッションに赴く前にも、「誰も解読できなかった」盃に書かれた銘の文字を哲人は読み解くことになる。ここにもヤコブソンはVC13とVCのほかの部分との調和を見るのである。¹⁵ また“盃の銘”がギリシャ語の散文からの翻訳であっても、これがスラヴ語で「詩」に訳されなかったことにはならないと、次のようなたとえで主張したのだった—「英語の“The mean dog suddenly died.” (「その獐猛な犬はとつぜん死んだ」) という散文は、ロシア語で“злой пес вдруг сдох”と4音節にも“свирепая собака внезапно околела”と14音節にも訳せるし、“Свирепый пес внезапно околел.”と、古典的な行中休止(цезура)を第2脚の後にもつ、弱強五歩格にすることもできる」。¹⁶

そしてシェフチェンコへの反論をヤコブソンはこう締めくくっている—「ギリシャ語テクストが断片的である以上、スラヴ語訳がVCのために作られたのか、VC以前にあったのか、またこれが哲人自らの作ではなかったのかという問題に最終的な解答を与えるのは難しい。けれど次のことだけは間違いない。この“盃の銘”はVCに最初から含まれてい

¹¹ Ševčenko, “The Greek Source,” pp. 1815-1816.

¹² Лавров. Материалы. С. 10.

¹³ Похвала. С. 234.

¹⁴ Лавров. Материалы. С. 12.

¹⁵ Похвала. С. 233-234.

¹⁶ Там же. С. 238

たのであり、前後の章そして VC 全体の文脈と分かちがたく融合しているのである」。¹⁷

じっさい VC13 章をめぐるには多くの議論がなされており、アプローチによってはスラヴ研究の枠をはるかに超えるものとなる。¹⁸ その主なものを列挙してみよう。

- ・この“盃の銘”は（スラヴ語訳者の意図として）詩なのか散文なのか。そしてこれは VC にもともと含まれていたのか、あるいは後年挿入されたのか。

- ・もとのギリシャ語テキストはどのようなものだったのか。もし発見されたものより長かったのなら、その部分は VC13 に含まれる語句と同じだったのか。また“盃の銘”と、909 の数、そしてその解釈は、起源的にどう結びついているのか。

- ・この詩の本初的な意図は何だったのか。そもそもこれはギリシャ語で書かれた詩なのか、それともヘブライ語あるいはラテン語などからの翻訳なのか。これらの問題は、この銘文の文化的帰属の問題へとさらに繋がるものとなる。

こうした問題の多くははまだ解決を見ず、新たにギリシャ語なり別の言語で書かれたソーステキストが見つからない限り、今後も決着を見そうにはないのである。本稿ではこの“盃の銘”に別の角度からアプローチし、ヤコブソンの主張を再検討したいと考える。そのためにもまず以下では VC の外に現れる“盃の銘”についてその出現環境を確認し、これを含むテキスト間の関係を整理していきたい。

2. VC 外の“盃の銘”

“盃の銘”が VC とは別のテキストの中に現れることは、夙に知られていた。¹⁹ この、VC 外で流布した“盃の銘”は3つのタイプに分けることができる。²⁰ すなわち (1) “盃の銘”に短い解釈がついて独立したテキストになる、(2) (1) より長い註釈がつく、(3)

¹⁷ Там же. С. 239.

¹⁸ 過去の諸研究については Mario Capaldo, *Respect of textus traditus or venture into conjecture? On a recent interpretation of Vita Constantini 13*. Polata knjigopisnaja, 25-26 (Amsterdam, 1994); Лурье В.М. Чаша Соломона — Чаша Ездры. Элементы раннехристианского благочестия в житии святого равноапостольного Кирилла, учителя словенского и их значение для истории текста // Славяне и их соседи. Вып. 5. М., 1994. С. 9-25.

¹⁹ たとえば Срезневский И. Сведения и заметки о малоизвестных и неизвестных памятниках. Т. 1. I-XL. ОРЯС. СПб., 1867. С. 96; Порфирьев И.Я. Надпись на чаши Соломона // Апокрифические сказания о ветхозаветных лицах и событиях. ИОРЯС.17.1. СПб., 1877. С. 240-241.

²⁰ 先行研究では本稿の (1) (2) を区別せず、VC 外に現れる“盃の銘”のテキスト環境を全体で2つに区分している：Ricard Picchio, “Chapter 13 of *Vita Constantini*: Its Text and Contextual Function,” *Slavica Hierosolymitana*, 7 (1985), pp. 133-152; pp. 140-141; Флорья Б.Н. Сказания о начале славянской письменности. II изд. СПб., 2000. С. 77.しかし本稿では (1) (2) を別のリセクションと判断する。

反ユダヤ主義的論調をもった『聖なる預言者たちの言葉 (Словеса Святых пророкъ)』とされる註釈書に埋め込まれる。以下ではそれぞれを SCh1, SCh1, SCh3 とし、これらの関係について論じる。なお VC13 章の“盃の銘”は VC13 とする。

2-1.

SCh1 に属する写本のうち、現時点で知られている最古のものは、13 世紀ロシアで成立したと推測される文集 Q. п. 1.18 に含まれる (以下 Q)。²¹ ほかに、至聖三者聖セルゲイ大修道院コレクション (РГБ) Ф.304, I. № 408 (Т408;15 世紀), 同 Ф.304, I. № 122 (Т122; 15 世紀) がある。またブルガリアのイヴァン・アレクサンドル文集 (1348 年)²² にも含まれている (IA)。R. ピッキオは、スレズネフスキーが刊行したノヴゴロド聖ソフィア大聖堂蔵 № 1449 を SCh1 に含めているが、²³ これには解釈部分がなく、「帝都の聖ソフィア教会に」で始まる部分から最後の *се естъ пррѣствъ въ хѣтъ* 「これはキリストについての預言なのである」まで VC13 と同一であり、VC の断片と考えられる。ただし、VC13 や上に示した SCh1 の写本で「盃」に記された文字は ‘ユダヤ’ と ‘サマリア’ の 2 文字だが (VC: на неи же соуть писмена жидовъска и самаренска грани написани ; SCh1: на неиже соуть написани стиси триъне нѣврѣиски и самарѣиски писмены),²⁴ № 1449 では *на нѣ соѹт писмена жидовска и самарѣиска и грѣческа* と ‘ギリシャの’ が付け加えられている。²⁵

これら SCh1 に属す写本は、聖書註釈などを含むさまざまな註釈書の性質の文書や「金口イオアンの言葉」と題された教訓的文書²⁶ を集めた文集に含まれている。では SCh1 と VC13 はどのように異なっているのか、確認してみよう。下がその比較である。

²¹ 現在ロシア国立図書館 (РНБ) 所蔵。本稿では原本および Halina Waṛóbska, *The Izbornik of the XIIIth Century: Cod. Leningrad, GPB, Q.p. 1.18 : Text in transcription*. Полага књигописъная (Nijmegen, 1987) を参照。

²² Evgueni Zshev, *Lavrentiy's Miscellany. Tsar Ivan Alexandăr's Miscellany of 1348. Phototype edition* (Sofia: Cyrillo-Methodian research center, 2015); Куйо Кувев. *Иван Александровият сборник от 1348 г.* София: БАН, Институт за литература. 1981. 本稿での引用は Zshev による。

²³ Срезневский. Сведения и заметки. С. 96; Picchio, “Chapter 13 of *Vita Constantini*,” p. 141.ただしこれについてはスレズネフスキー自身が VC からの抜き取りとしている。

²⁴ VC は FRB p. 26 に, SCh1 は Q (Q.п.1.18. 3об.) による。

²⁵ Срезневский. Сведения и заметки. С. 96.

²⁶ 中世ロシアでは「金口イオアンの言葉」と題されたテキストが多くあるが、それらはしばしばヨアンネス・クリュソストモスの名に関係付けただけのもので、なかには由来不明のテキストもある。たとえば三谷恵子『『ヨアシ王の夢』—中世スラヴテキストの分析—』『ロシア語研究』2016 年, 91-109 頁; 92 ページ注 2 を参照。

<表1 Sch1 と VC13 の比較>

	Sch1 (Q)	VC13 (Лавров)
(1)		Философъ же иде в Царьградъ и видѣвъ цара . . .
(2)	Въ сѣби софзи ксть <u>кельна</u> соломона ѿ камене драгаго дѣлана . . .	Есть же въ сватѣи Софїи <u>потиръ</u> ѿ драгаго каменїа . . . [Взем же ю философъ почетъ и сказа]
(3)	Първыи стихъ сице. Чаша моя чаша моя прорицани то дондеже звѣзда . . . и по семь числа написана. ѿ. и ѿ.	Есть же сице прѣваа грань чаша моя чаша моя прорицани дондеже звѣзда . . . и по семь число написано: девать сотъ и деватеро.
(4)		Расчетъ же а по тонкоу философъ обрѣте ѿ дванадесате лѣтъ царства Соломона до царства Христова девать сотъ и деватеро лѣтъ. И се есть пророчество w Христѣ
(5)	Т. Чаша ксть прѣсрво. и моудрость Соломона. а звѣзда прорицаетъ рѣтво Хѣо. въ пиво боудтъ ѣви. първѣнцю вѣдацю ноцю. Т. Първѣнць ксть Хѣъ. вѣдѣ бо въ тоу ноць въ нюже вечера и пи. и преданъ бы [...] Се князь. Т. Пилатъ. сборъ Жидовскъ оузратъ славоу его. Т. оузратъ въскрсение Хѣо [...] А числа. ѿ второго на десате лѣта. црства Соломона. до Хѣа. лѣтъ девать сотъ. и. ѿ. лѣтъ. [解釈。盃は預言、またソロモンの知恵。星はキリストの誕生を預言する。夜眠らずにいる初子たる主が飲むためのものとなる、とは。解釈。初子はキリスト、晚餐を食し飲み、引き渡された夜に起きていたのだ。[...] 王とは。解釈。ピラト。ユダヤ人の会衆が彼の栄光を見るとは。	

<p>解釈。彼らはキリストの復活を見るであろう。 [...] 数は。ソロモン王の治世の12年目からキリスト（誕生）まで909年である]</p>	
---	--

ここで便宜的に(1)～(5)と分割したうち(1)はVCにしかないが、(2)(3)のテキスト本体はSCh1とVC13ではほぼ一致する。ただしQ, T408, IAではいずれも「盃」に当たる語に *потирь* ではなく *келія* が用いられている。IA, T408の該当部分は以下の通り。

IA	T408
<p>Въ сѣѣи софїи естъ <u>келїа</u> соломоуиѣ. ѿ камене драгаго дѣлана. на неи же написани сѣтъ стиси триѣ. єврейскы и самаренскы писмены.</p>	<p>Въ сѣ Софѣи естъ <u>кѣліа</u> Соломона ѿ каменна драгаго дѣлана. на неи же сѣ^т написаны стиси триѣ. єврѣиски самарѣиски писмены.</p>

またT122では *въ св. Софии есть комора Соломана сына Давида от камня другого (sic.) сделана* と、「盃」にあたる部分は *комора* ‘部屋’だが、これは *келія* から *комора* への書き換えだろう。この推測は、これら4写本がほぼ同じコンヴォイをもつことからかなり確かであろうと思われる。²⁷

このようにSCh1とVCの“盃の銘”は事実上同じものだが、VC13ではそのすぐ後に909の数があり、これを哲人が読み解くのに対し、SCh1では(5)の解釈が示されて最後に「ソロモン王の時代の12年めからキリスト誕生まで909年である」の一文が置かれている。

2-2.

SCh1よりさらに長い註釈のついたSCh2は、15世紀以後のロシア写本でのみ知られ、しばしば『旧約聖書註釈書』(Толковая паляя, TP)に付随して現れる。先行研究によって知られているものに、ロシア国立歴史博物館(ГИМ)バルソフ・コレクション№619(15世紀)、キリルペロゼルスキー修道院・エフローシン集№22/1099(KB22; 1450-70頃)および同じくエフローシンによる後年の№11/1088、至聖三者聖セルギイ大修道院コレクションФ.304, I. №729(15世紀)、同№793(16世紀)、ノヴゴロド聖ソフィア聖堂図書館写

²⁷ Q, IA, T408, T122の密接な関係については三谷恵子『『ヨアシ王の夢』』, 102-106頁; ‘コンヴォイ’については *Лихачев Д.С. Текстология (на материале русской литературы X-XVII вв).* СПб., 2001. С. 246.

本№1450 などがある。²⁸

これらの SCh1 との違いは、まず「帝都の」と具体的な場所指定を含む点にある。SCh1 にはこれがなく、むしろこの点で SCh2 は VC13 に近い。つぎに「盃」に関する描写が大きく異なる。Ch1 では単に「ソロモンの作になる宝石でできた盃」とあるのみだが、SCh2 では次のように、盃の形状と外見が詳しく描かれている。²⁹

Есть в цѣрградѣ во стѣви софнии потиры соломона дѣла и есть ковѣнзѣна. ꙗ. грани³⁰ ѿ драгы^х каменни. ꙗе нарицаетса .а. камѣ аханъ³¹ .б. измарагдъ .г. самфиръ. д. карвамикюдъ. е. лоухнитъ. .с. анфраксъ и инии мнози свѣтли каменни соу же стихи. ꙗ. е написаны. первыи на .а. и грани самарѣвскыи. вторыи на .б. и грани еврѣвскыи. третїи на .г. грани грѣескыи. стї . . .

帝都の聖ソリア教会に、ソロモンの作になる盃があり、宝石で3つの銘が嵌め込まれている。宝石はまず第一に貴石というものであり、第二にエメラルド、第三にサファイア、第四にルビー、第五に真珠、さらに紅玉、またほかの多くの輝く石である。(それらは)3行で書かれており、第一の銘にはサマリアの、第二の銘にはユダヤの、第三の銘にはギリシャの文字で行が書かれ...

そしてこの後、“盃の銘”の「わが盃、わが盃」から2行目「別の木から作られた」までは VC13 と同じ語句が再現されるが、その先は ꙗе. древо ино есть крѣтъ. а вкоушение о распатыи глѣть ꙗко вкоуширѣны еж копнѣмъ в ребра проводѣ быи и возпитъ у вог словоу. . . ‘解釈。別の木とは十字架。食べ物とは磔刑のことを言う。食され脇腹を槍で貫かれ、十字架の上で神に呼ばわったのだ...’と註釈が続き、この行がイエスの処刑、死と埋葬を意味すると説く。さらに銘文3行目の前半 кнзъ и оузритъ весь сборъ славу его възратъ‘王(がおり)全会衆がその方の栄光を見る’にも на ныи оужасноутса. самы ꙗъ цѣь. посредѣ ихъ плотию распатиса‘(そして)

²⁸ Picchio, “Chapter 13,” pp. 140-141; Capaldo, *Respect of textus traditus*, pp. 10-12; *Водолазкин Е.Г.* Из истории кирилло-белозерских палей // Книжные центры Древней Руси: Книжники и рукописи Кирилло-Белозерского монастыря. СПб., 2014. С. 286-309; С. 291.

²⁹ KB22, 513-514об.

³⁰ ꙗ. грани について、Capaldo (1994) は別の写本に依拠して「3つの面に」と訳している。じっさい грань/грань は古ロシア語で‘行’‘端、境界(の線)’‘面’のほか‘タイトル’‘(行の初めの)文字’など様々な意味で用いられており、ここで写字生がどのような意味に解釈したかは曖昧である：Словарь русского языка XI-XVII вв. Вып. 4. М., 1977. С. 122, 124-125.

³¹ АХАНЪ は詳細不明の語。もっとも形が近いのは ахонтъ/яхонтъ と考えられる。ロシア語の яхонт の起源についてファスマーは中高ドイツ語 jächant あるいは古典ラテン語 hyacinths を結びつけている：Словарь русского языка XI-XVII вв. Вып. 1. М., 1975. С. 59; *Фасмер М.* Этимологический словарь русского языка. Т. IV. М., 1987. С. 540.

彼に（人々は）恐れ慄く。主なる王自身が彼らの中央で肉体をもって磔刑に処される’と解釈が与えられる。この言葉は VC13 にはないが SCh1 の *оузрат воскресіе хѣо и оужаснутьса ... Христосъ плзгью разпятьи приятъ посреде их* ‘（彼らは）キリストの復活を見て恐れ慄く...キリストは彼らの中央で肉体をもって磔刑を受けるのである’と共通する。

SCh2 では面白いことに、一連の解釈の最後に、909 の数を読み解く「哲人」が現れ、しかもその哲人はロシアにヴラジミルを教えに来た者で、その名をキリルという、と説明がつくのである：*их же стих во никто̄ можетъ протоковати. но протокова древлею же приходи в роушь философъ оучитъ владимера. емоу же бѣ има кирил.*³²

このように SCh2 は、“盃の銘”の3行がイエスの誕生、最後の晩餐と処刑、それに復活を預言するのだという解釈を与える点で SCh1 と共通するが、「帝都の」という場所の明示や盃の描写、銘文の解釈部分に SCh1 にはない福音書の言葉—たとえば「槍で彼の脇腹を貫き」³³—を想起させる表現を含む点、そして最後に909の謎を解読する「哲人キリル」が現れるといった点で異なる。

2-3. SCh3

SCh3 は『聖なる預言者たちの言葉（Слово Святыхъ пророкъ）』（以下 SSP）と呼ばれてきたテキストの中に埋め込まれて現れる。SSP は古くより TP との関係で論じられてきたが、その由来や成立過程は完全には明らかにされていない。³⁴ 仮想のユダヤ人に *разумен жидовине* ‘ユダヤ人よ、覚れ’、*послушан жидовине* ‘聞け、ユダヤ人よ’と語りかけるスタイルをとり、旧約聖書の言葉をキリスト教的ドグマにもとづいて解釈した文書である。I. イストリンや A. シャフマートフは、キリルベロゼルスキー修道院コレクション № 67/1144 に含まれる写本 (KB67) を 1200 年代前半の作としたが、最近の E. ヴォドラスキンは KB67 を 16 世紀の作とし、また SSP そのものは TP がロシアで形成された後に創作され、現存する写本の言語特徴からその発生場所は北ロシアと判断している。³⁵

³² KB22, 514об.

³³ たとえば *копьемъ ему ребра проводе*: Codex Marianus, Jo., 19.34. [<http://titus.fkidg1.uni-frankfurt.de/texte/etcs/slav/aksl/marianus/maria.htm>] (2017年3月2日閲覧).

³⁴ 『聖なる預言者たちの言葉』という表題はエフセイェフがテキスト刊行のさいに依拠した写本の Incipit による。いっぽうヴォドラスキンは、キリルベロゼルスキー44/1166 に依拠して同じテキストを『ソロモンの預言（Пророчество Соломона）』とし、このテキストは TP をふまえて創作されたと言う：*Евсеев И.Е.* Слова святыхъ пророкъ. Противоиудейскій памятникъ по рукописи XV вѣка. М., 1907; *Водолазкин Е.Г.* Всемирная история в литературе древней Руси. СПб., 2008. С. 389-467; Он же. Пророчество Соломона и Толковая палея // ТОДРЛ. Т. 52. СПб., 2001. С. 518-529.

³⁵ *Водолазкин.* Пророчество Соломона. 524ff; ヴォドラスキンの見解に対する批判にはたとえば

さて SCh3 は, Соломонъ пррѣства. で始まる SSP の冒頭の部分で次のように現れる。³⁶

... у҃чиниже и потырь на службу б҃гѹ. ... баше же чаша та тричастно сотворена на три грани³⁷
по троицескою образу. на первой грани написа жидовьскою грамотою. ЧАША МОЯ ПРОРИЦАИ
ДОНДѢ ЗВЪЗДА ВЪ ПИВО БОУДИ ГВІ. ПЕРВЕНЦЮ БДАЦЮУ НОЦЪ. ПОСЛОУШАИ ЖИДОВИНЕ, ПРРѣТВА И
ПРЕМУДРОСТИ СОЛОМОНА. ЧАШНО СОДЕЛА В КАМЕНИ САМФИРА. НА НЕМЖЕ ПЕРВЫИ ЗАКОНЪ МОИСѢВИ
ВПИСА БГЪ

... (ソロモンは) 奉神礼のための盃も作った...その盃は 3 部より成り, 三位一体の形になぞらえて3つの面をもつ。その第一の面にはユダヤの文字で書かれている一わが盃, 預言せよ, 星の現れるまで。夜眠らずにいる初子たる主が飲むためのものとなれ。聞けユダヤ人よ。ソロモンの預言と知恵を。(ソロモンは) 盃をサファイヤの石から作ったが, その石には神がモーゼの第一の掟を書き込まれたのだ。

ここに引用した部分最初の「... (ソロモンは) 奉神礼のための盃をも作った (у҃чиниже и потырь)」は, 明らかに VC や SCh1, 2 にある「ソロモンの作になる盃 (потирь соломона дѣла)」をパラフレーズしたものだだろう。そして上掲の下線部は VC13 の最初の行と同じである。ただしこの後には“盃”についての長い解釈の行が続く。やがて на второй грани. самарѣнскою грамотою. на вкуошение сотворенаго ѿ древа инога пивъ взспи аллѹта. и упи сз веселиемъ се пакы прорѣ ѿ стрѣти ѣ тою чашено... (「第二の面にはサマリアの文字で...」) と, 再度 VC13 とほぼ同じ言葉が現れ, これにまた長い解釈が加えられる。その後 на трети грани взвбражено жидовськыми же писмены. се кнзь зрить. и въ соборъ видѣ славу его. и дѣдъ црѣ посрѣ их (「第三の面はユダヤの文字で作られている。王が見, またすべての会衆が彼を見る。そしてダヴィデ王はかれらの中央にいる」) とあり, これには кнзь зрить пилѣ. а збѣ жидове. узрѣша славу его... (「王が見るとは。ピラト。会衆はユダヤ人たち。彼らはかの人の栄光を見るのである」) という註釈が与えられる。この最後の部分は SCh1, SCh2 に共通する表現である。

909 の数についても VC13, SCh1, 2 に共通する文言を確認することができる: в тои же чашѣ посрѣ ея дна написѣ числа .и. ѿ. 38 лет яже толкуеть ѿ .бѣ. лет Соломонова црѣтва до хѣа рѣства ।

Basil Lurié, “Slavonic Texts of Hard Fate: The Prophecy of Solomon and some others. Toward a recent book,” *Scrinium*, V. 2009. pp.364-390. とくに 367ff.

³⁶ Евсеев. Словеса святыхъ пророкъ. С. 20.

³⁷ この грани は ‘行’ ‘銘文’ では意味が通じないので ‘面’ と訳した。

³⁸ これでは 909 にはならない。 .ц.и. ѿ がどこかで写し間違えられたのだろう。

ἡ.α.δ. ... (「その盃には底の中央に 1009 (?) 年とある。これはソロモン王の 12 年からキリストの誕生まで 909 年と解釈される」)。

3. SCh1, SCh2, SSP の関係

2 で述べたことをまとめると，“盃の銘” は下の表 2 で示すような異なる構造をもったテキストの中に現れていることになる。

＜表 2 SCh1, SCh2, SCh3 の構造比較＞

VC13	SCh1	SCh2	SCh3
哲人, 帝都に着く。 聖ソフィア教会に ソロモン作の...	聖ソフィア教会に ソロモン作の...	帝都にある聖ソフィ ア教会にソロモン作 の... ＜盃の描写＞	「ソロモン王が盃を 作った」
“盃の銘” 1.わが盃... 2.主の食べ物と... 3.王がおり...	“盃の銘” 1.わが盃... 2.主の食べ物と... 3.王がおり... ＜解釈＞	“盃の銘” 1.わが盃... 2.主の食べ物と... ＜解釈＞ 3.王がおり... ＜解釈＞	“盃の銘” 1.わが盃... ＜解釈＞ 2.主の食べ物と... ＜解釈＞ 3.王がおり... ＜解釈＞
哲人が 909 を解読	909 の数と解釈	「哲人」が 909 を解読	909 の数と解釈

そして上の表 2 と前節で見たことから、以下のことが指摘できる。

(1) SCh1, SCh2, SCh3 はいずれも VC13 とほぼ同じ“盃の銘”を再現しており、また 909 の数とその解釈も共通して含む。ギリシャ語版の“盃の銘”が全体としてどのようなものだったかは不明だが、少なくともスラヴ世界には、3 行からなる“盃の銘”に 909 の数とその解釈が付随したプロトテキスト（これを SChQ とする）があり、これがさまざまな形式に発展して流布したことが確認される。

(2) SCh1～3 はいずれも、盃の銘文をイエスの誕生、受難、復活という 3 つの主題に結びつけて解釈している点で共通する。この解釈は VC13 にはない。

(3) SCh1 と SCh3 の間には明確な連続性がある。たとえばこの盃の銘についてどちらも

「これはソロモンの預言と知恵」としている。また、第1行め「夜眠らずにいる初子」の解釈にも共通の文言が現れる。

SCh1: Т. Първеньць есть Хс. бѣде бо въ тоу ноць въ нюже вечеря и пи и преданы быс

SCh3: Первенцу же бдящу ноцию первенець. Христос бде бо в ту ноць в нюже вечеря со ученикы и преданъ бысть³⁹

「夜眠らずにいる初子とは。キリストが<弟子とともに^{SCh3}>晩餐を食べ飲みそして引き渡された夜に起きていたのである」

これに該当する文言は SCh2 にはない。

また「王が彼らの中央にいる」の解釈にも SCh1 と SCh3 で共通する部分がある。

SCh1: И двѣз церь посреде ихъ. Т. Христосъ плзтью распятъ приатъ посреде их. от племени Давида плзть примъ.

ダヴィデ王は彼らの中央にいる。解釈。キリストはその肉体をもって人々の中で磔刑にかけられたが、その肉体はダヴィデの一族から得たのである。

SCh3: Давидъ же царь посреди ихъ. Христосъ от племени Давыдова плотью распятие приа посреди васъ жидове

ダヴィデ王は彼らの中央にいる。ダヴィデの一族であるキリストは、あなたがたユダヤ人の（見る）中で肉体をもって磔刑に処せられたである。

(4) SCh2 には、2-2.で見たとおり、SCh1、SCh3 にはない福音書への言及が含まれる。また 909 の謎を解く「哲人」が現れる。この哲人の出現は、「帝都で」という場所設定とともに、ロシアでこのテキストが伝播するさい二次的に VC の影響を受けて付け加えられたものと推測される。

以上を総合すると、次のようなテキスト形成のプロセスが推測できる。まず SCh1 と SCh2 には SChQ から派生した共通のソース(SCh0)があっただろう。これはおそらく SChQ に、“盃の銘”がイエスの誕生・受難・復活を預言するという註釈が加わったもので、SCh1 にかなり近い形だったと推測される。SCh1 に現れる **Въ стѣви софзи кестъ келья соломона** の **келья** についてシェフチェンコは、旧約偽典『ソロモンの遺言 (Testament of Solomon) 』

³⁹ Евсеев. Слова святых пророк. С. 20.

に出てくる“魔法の盃”に使われている κούλιξ との関連性を示唆しているが,⁴⁰ ここはもっと単純に, *келья* は SCh1 に先立つテキスト (SCh0-1) にあった *велья/веля* (<велии ‘大きな’)> の写し間違いであり, その SCh0-1 には *веля γαση* のような語句があったのではないかと筆者は想像する。в と κ は古写本ではしばしばよく似た形をしているうえに, 「聖ソフィア聖堂」のような場であれば *келья* ‘小部屋’ という語が写字生の頭に浮かんだとしても不思議ではない。じっさい SCh1 のより新しい写本には *суть велика (γаша) д’вля Соломона ѿ камня драгаго сод’влана...*⁴¹ と書かれたものがある。VC13 また SCh2, 3 の多くの写本で, 盃は *потирь* あるいは *потыррь* と現れるが, これは“盃の銘”の原文ギリシャ語テキストにある *ποτήριον* をそのまま用いたものだろう。しかし SCh0 から SCh1 ができるまでに, これをスラヴ語式に *веля γαση* のように訳した異本が作られ, Q に代表される SCh1 の写本はそれを間違っただけで写したのではないかと推察されるのである。

いっぽう SCh2 は, 中世の東方教会圏スラヴ世界で数多く作られた同種の註釈書の文書の影響を受けて SCh0 から独自に派生し, さらに VC の二次的影響のもとに今日あるような形になったのだろう。また SCh3 は, その解釈部分の文言に SCh1 との共通性が見られることから, SCh1 を取り込んで成立したと推測される。ただしここでソーステキストになったのは *потирь* あるいは *потыррь* をもつ写本だったのかもしれない。ヴォドラスキンによれば, SCh3 を内包した SSP は TP をふまえて作られたもので, SSP が作られるさいに, TP に付随して置かれていた“盃の銘”が取り込まれたとされる。⁴² しかし TP の後ろにしばしば出てくるのは SCh2 であり, いっぽう本稿の比較で明らかになった限りで SCh3 により近いのは SCh1 である。これを考えると SSP への“盃の銘”の内包プロセスは, ヴォドラスキンが推測するように「TP の後ろにあった“盃の銘”を SSP の作者が埋め込んだ」というほど単純なものではなく, まず SCh1 から SCh3 へのテキスト的拡張がどこかで生じ, それが SSP の形成の中で埋め込まれたと見た方が妥当なように思われる。いずれにしても SCh2 には SCh1, SCh3 と異なる特徴があり, このタイプのテキストの成立についてはさらに詳しい検討が必要であろう。SSP の成立についても, そこに内包されるテキストのより詳細な検討が課題であると考えられる。

4.

⁴⁰ Ševčenko, p. 1816, n. 49.

⁴¹ *Порфирье И.Я.* Апокрифическая сказания о ветхозавѣтных лицахъ и событіяхъ по рукописямъ Соловецкой библиотекы. Сборникъ ОРЯС. XVII. СПб., 1877. С. 240.

⁴² *Водолазкин.* Пророчество Соломона. С. 524-525.

VC 外に流布した“盃の銘”についてひとつお見したところで、再びヤコブソンの主張にもどることにしよう。

本稿の考察で、VC13 と SCh1~3 に共通するソースとしての SChQ の存在が浮かび上がってきた。ヤコブソンの主張のとおりなら、この SChQ は VC の形成に先立って作られており VC が書かれたときにその一部となったか、あるいは VC のために（ギリシャ語から訳されて？）作られたことになる。後者のオプションは、SChQ>VC13>SCh0 という派生の流れを合意するが、この可能性は完全に否定できないにしても、退けてよさそうに思われる。VC13 から、中世スラヴの「知識人」たちの間では崇拜の的であったはずの哲人の姿を消し去って SCh0 が生まれた、とは考えにくいからである。では前者のオプションを想定すると、どうなるだろうか。

もし広く考えられているように、VC がコンスタンティノス=キュリロスの死の直後、その側近の弟子によって9世紀末に書かれたとすると、⁴³ これに先立つ SChQ は9世紀後半、もしかしたらコンスタンティノス本人が存命中に作られたかもしれないことになる。すると私たちはここにスラヴ文語最初期の、もしかしたら哲人自身による、創作を見ているのかもしれない。これはたいそうロマンをかきたてる説ではあるし、このテキストの言語的古さ（たとえば *сѣньмъ* ‘会衆’）は、これがスラヴ文語初期に属することを示唆してはいる。とはいえ、VC の現存する写本は15世紀より前に遡れることができず、また SCh1 の最古の写本である Q も13世紀のものである。結局のところ SChQ がいつ頃作られ、それがどのようにして VC の13章となったかについて検証できる材料を私たちはもっていないのである。

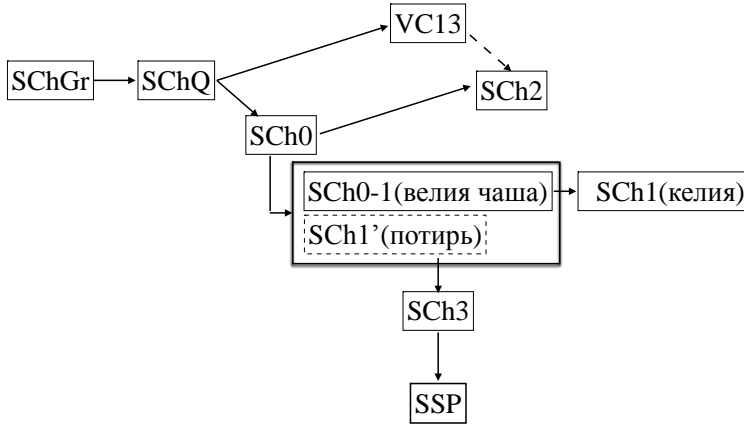
VC13 が VC にもともと含まれていたというヤコブソンの主張も、同じように証明しがたいものである。ヤコブソンが指摘したように、13章と VC のほかの部分にはテキスト的整合性が認められるかもしれない。けれどそれが VC の原著者の技であったか、あるいはこの聖人伝が伝播する間に、後世の写字生あるいは編集者によって加えられた修正ゆえかは、わからないのである。

すくなくとも本稿の考察の範囲で言えるのは、以下のことである。すなわちまずギリシャ語の“盃の銘”（SChGr）からスラヴ世界で SChQ が作られ、これがいっぽうではコンスタンティノス=キュリロスの事跡と結び付けられて VC13 となり、他方ではキリスト教的註釈を加えられた SCh0 が派生した。ここから SCh1, SCh2 が作られたことは上記に述べ

⁴³ たとえば *Хабургаев Г.А.* Первые столетия славянской письменной культуры. Истоки древнерусской книжности. М., 1994. С. 22; *Флоря Б.Н.* Житие Константина Кирилла. Вступление. Библиотека литературы древней Руси. Т. 2. [<http://lib.pushkinskiydom.ru/Default.aspx?tabid=2163>] (2017年3月1日閲覧).

たとおりである。これを図式にすると以下のようになるだろう。

＜“盃の銘”を含むテキストの関係＞



ヤコブソンのVCに関する議論のうちで、この偉大な学者の思い違いと考えられるのは、彼がVCを「聖人伝」ではなくあたかもコンスタンティノスの生涯の記録であるかのように読んだことではないかと思われる（「神学者グレゴリウスへの賛辞」の解釈にそれが現れている）。SChQがどの時点でVCの一部となったか—VCの原著者がVCを創作したさいに取り込んだのか、このテキストの伝達者が後年挿入したのか—については検証しようがなく、この意味でヤコブソンの主張は支持することも否定することもできない。いっぽう、“盃の銘”がスラヴ語の「詩」として訳されたという主張には、耳を傾けるべきものがあるようにも思われる。1節で見たヤコブソンの解釈はそのままでは受け入れ難いが、本稿で見たとおり、VC外のテキスト環境に埋め込まれても、“盃の銘”の文言は、まるで誰かがパスワードをかけて「変更不可」とロックしたかのように、ほとんど書き換えられることなく再現されていた。中世ロシアの写字生や文集の編集者たちにも長く、この三行の文言が、変えてはいけぬ特別な響きをもって聞こえたのかもしれない。

いずれにしても、幅広い古典の素養を背景に、詩的想像力豊かにスラヴ文献研究を推進したヤコブソンはいまなお、スラヴ文献学への挑戦的課題を提示している。

おわりに

VC13章に現れる“盃の銘”の謎は解き難く、そのためにこれからも研究者の関心を引き続けるだろうが、このテキストに現れる *грань/гранъ* もまた、謎に満ちた語である。古教会スラヴ語や古ロシア語でこれらはどちらも *стих*「行」を表わしうるが、同じように「行」を表す名詞には *грано* という中性名詞もあり、こちらは *s* 語幹名詞のように変化して (*гранесе*) 用いられた。一方古ロシア語にはこれらの語を「境界、境目、切れ目」あるいは「(切った) 面」の意味で使用したと考えられる例もある。⁴⁴ じっさい本稿 SCh1~3 に出てくる *грань/грани* にも、それぞれの写本の中で、写字生たちがどう理解していたのかよくわからない場合がある。そしてこれらの語の起源もはっきりしないのである。⁴⁵

この由来不明の語についてはファスマーがその語源辞典で *грано*「行」と *грань*「端、境界、(切った) 面」を別項目で扱っているのだが、⁴⁶ ヤコブソンはこれに対し、“While reading Vasmer’s dictionary”の中で「古教会スラヴ語の *grano* (そして *granъ*) ‘行、列’ と *gran’* ‘境界、区切り (segment)’、それにロシア語動詞 *granít’* ‘切る’ は区別すべきではない」と述べている。⁴⁷ 記述はたった2行でそれ以上の説明はなく何を根拠にこう述べたのか不明だが、たしかに行を作るという作業と‘行’という概念が、文字文化を獲得したスラヴ人にとって必要となったときに、スラヴ語にもともとあった‘区切り、境’を表す語をこれに当てたとしても、不思議ではないようにも思われる。

⁴⁴ 注30を参照。

⁴⁵ *Турбачев О.Н. Этимологический словарь славянских языков. Праславянский лексический фонд. Вып. 7. М., 1980. С. 49.*

⁴⁶ *Фасмер М. Этимологический словарь русского языка. Т. I. М., 1986. С. 452.*

⁴⁷ Roman Jakobson, “While Reading Vasmer’s Dictionary,” *Selected Writings. II. Word and Language* (The Hague, Paris: Mouton, 1971), pp. 620-649; p. 626.

Inscription on Solomon's Chalice in Chapter 13 of *Vita Constantini*:
Revisiting Jakobson's Contribution to the Slavic Philology

MITANI Keiko

Roman Jakobson's view that the "inscription on Solomon's chalice" in Chapter 13 of *Vita Constantini* (Житие Константина-Кирилла; VC) was a form of poetry and the chapter containing it an integral part of VC was severely refuted by I. Ševčenko. Relying on an eleventh-century Greek manuscript found by himself in *Scorialensis*, Ševčenko argued that the Slavonic "inscription" was a prosaic translation of the Greek text, and that the translation was interpolated into VC in order to demonstrate the philosopher's superior intellectual powers. Represented by this Jakobson–Ševchenko dispute, most of the questions concerning Chapter 13 of VC remain unsolved.

This paper attempts to examine Jakobson's argument on this issue by analyzing textual variations in which the "inscription" is contained.

The "inscription" appears outside VC in three independent texts (SCh1, SCh2, SCh3); in each text, the "inscription" is accompanied by exegetical commentaries, different in length and wordings but conveying one and the same message: that the inscription is a prophesy on Jesus's birth, passion, and resurrection.

On the basis of critical analysis of these versions, this paper concludes that the versions of the "inscription" in VC and the other three texts were derived from a common source (SChQ). Jakobson's integralist argument thus can neither be proved nor excluded because of the lack of evidence on when and how the integration process of SChQ into VC was undertaken.